

P2-65-8 茎捻転を繰り返した小児卵巣広汎性浮腫の一例

近畿大

青木稚人, 鈴木彩子, 高矢寿光, 浮田真沙世, 小谷泰史, 藤島理沙, 宮川知保, 貫戸明子, 村上幸祐, 島岡昌生, 中井英勝, 万代昌紀

【緒言】卵巣茎捻転は卵巣の腫瘍性病変を契機として発症することがほとんどで、非腫瘍性の茎捻転は稀である。今回我々は非腫瘍性の茎捻転を繰り返した小児の卵巣広汎性浮腫（massive ovarian edema：MOE）を経験した。【症例】9歳女児，初経未発来。2日間続く下腹部痛を主訴に前医を受診したが，経過観察となった。しかし症状が増悪したため同医を再診。経腹超音波検査で卵巣腫瘍茎捻転を疑われて当科紹介となった。MRI検査で左卵巣が腫大，T2強調像にて淡い高信号を呈し，卵巣の辺縁部に拡張した既存の卵胞が配列する像を認めた。MOEとその茎捻転の可能性が高いと判断し，同日緊急腹腔鏡下手術を施行した。左卵巣は卵巣固有靱帯を中心に1080°捻転しており，うっ血所見を認めるものの捻転を解除すると色調が改善したため，卵巣組織の生検は施行せず終了した。その後は卵巣の縮小を確認し，術後3か月で終診となった。しかしその9か月後に再度徐々に増悪する下腹部痛が出現し，左卵巣のMOEと茎捻転が疑われたため，緊急腹腔鏡下手術を施行した。この際は骨盤漏斗靱帯を中心とした左卵巣の1080°の捻転と左側の鼠径ヘルニアを確認した。再度捻転解除術のみを施行して終了，以後経過観察しているが卵巣の縮小を確認し，現在まで茎捻転の再発なく経過している。【考察】MOEは間質の浮腫を伴うが，腫瘍性病変を伴わない卵巣の充実性腫大である。若年発症が多いにもかかわらず，付属器切除が行われている報告が多い。特に初経前の女児では正常卵巣の捻転によることが多く，付属器温存が重要となる。小児急性腹症の原因としては急性虫垂炎が多いが，鑑別疾患としてMOEも念頭に置くことが必要と考えられた。

P2-65-9 石川県における母乳中ダイオキシン濃度の変化—10年前との比較—

金沢医大

山口直孝, 大阪康宏, 柴田健雄, 高木弘明, 笹川寿之

【目的】ダイオキシンは，ダイオキシン類，フラン類，ダイオキシン様PCBの総称であり，母体の暴露により死産・流産・胎児奇形の発症率が増加すると考えられている。しかし，我が国の母乳中ダイオキシン類の濃度は，以前と比べ1/5程度に減少しているという報告もあることから，本学所在地の石川県における母乳中ダイオキシンの濃度が10年前と現在でどのように変化しているかを検討した。【方法】平成26年9月から27年3月までに当院産婦人科で分娩に至り，母乳提供の同意を得られた16症例（初産7症例，経産9症例）を対象とした。1か月検診時に母乳を採取し，ダイオキシン濃度をGC-MSにより測定した。その結果を10年前に採取され，同様な方法で測定された39症例（初産15症例，経産24症例）のダイオキシン濃度と初経産に分けて比較した。【成績】経産婦ではダイオキシン・フラン類の母乳中の濃度は減少しており，全体としては10年前と比較し，母乳中の濃度は有意に減少していた。初産婦ではフラン類に関しては有意に減少していたが，ダイオキシンに関しては有意な減少は認められず，全体としては有意な濃度の減少は認められなかった。【結論】母乳中ダイオキシン濃度は減少してきていると考えられるが，乳児期だけでなく，胎児期の臍帯血を経由した暴露指標でもあることから，今後もモニタリングの継続が必要であると考えられた。